

2017年度 研究室活動記録

オープンラボ記録

本年度のオープンラボは日程を1日、1回のみに変更し、院生によるコース紹介と個別相談を実施した。

<実施概要>

◆日時：2017年5月24日（水）17:30~18:20

<コース紹介>

名倉早都季（図書館情報学研究室）

大野公寛（社会教育学・生涯学習論研究室）

丹田桂太（社会教育学・生涯学習論研究室）

末光翔（社会教育学・生涯学習論研究室）

ワンデーセミナー記録

本年度も図書館情報学研究室と社会教育学研究室の研究交流を目的として、両研究室の大学院生とOB/OGが研究内容を発表した。

<実施概要>

◆日時：2017年9月5日（火）10:30~16:30

◆会場：赤門総合研究棟A200

◆発表者：今井福司，山口香苗，茅野良太，佐藤智子，青山貴子，松田ユリ子

2017年度 講義内容一覧

【生涯学習論基本研究Ⅰ】担当：教授・牧野篤

本年度からS1期のゼミは牧野教授が単独で受け持つこととなり、クリフォード・ギアーツの『ローカル・ノレッジ』を講読した。本著は文化人類学の文献であるが、広く人文系の分野における、「研究とは何か」、あるいは「研究者はいかにして対象に関わるか」といった本質的な問いに迫るものであり、社会教育学・生涯学習論の研究にとっても大いに示唆に富んだものであった。ゼミ中の議論は本著の内容理解に関する議論が中心であったが、文化相対主義、反相対主義という人文研究の立場の歴史的変遷を押さえつつ、その対立構造の克服を試みたギアーツの著書を読み解くことで、各個人が自らの研究を顧み

る契機となった。

【生涯学習論特殊研究Ⅰ】担当：准教授・李正連

A1のゼミでは、海外の事例や研究との比較を一つのテーマに、近年出版された①『大都市・東京の社会教育 一歴史と現在』（2016）、②『躍動する韓国の社会教育・生涯学習 一市民・地域・学び』（2017）の2冊を講読した。日本と韓国の社会教育・生涯学習を検討する著作である2冊を、本の構成と内容の面から比較検討する過程で抽出された各地域の特徴や傾向を軸に議論が進んだ。さらに、最終日には、②の編集委員を務められた小田切督剛氏にお越しいただき、国を超えて編集・出版するという視点からも文献を検討した。

【生涯学習論特殊研究Ⅱ】担当：准教授・新藤浩伸

本演習は、主として文献講読を通じて、「文化」の観点から生涯学習・社会教育を考察する基本的視点の獲得を目指すものであった。また、社会教育職員として文化活動の実践を開拓してきた山崎功氏（元昭島市社会教育主事）をゲスト講師として、学部ゼミ（社会教育学演習Ⅲ）と合同で学んだ。文献講読では、北田耕也他「社会教育と文化」（1989）、草野滋之・畑潤「文化活動と身体・表現」（2004）の二本のレビュー論文から先行研究の蓄積を確認し、宮原誠一「芸術と社会教育」（1962）、碓井正久「社会教育と文化」「社会教育と教養」（1970）、松下圭一『社会教育の終焉』（1986）から、「抵抗」や「教養」の視点、社会教育行政と文化行政の関係などを検討した。そして、デヴィッド・ジョーンズ『成人教育と文化の発展』（2016）を通読し、認知科学、国際比較、成人教育論の視野も含めた成人教育と文化の関係を考察した。また、文献講読という形式がどのような力を身につけるためのトレーニングかも演習の中で示された。今後、文献に即した議論をさらに活発にしていきたい。

【公民教育としての社会教育の形成と展開】担当：非常勤講師・上原直人

本集中講義では、公民教育の視点から日本の社会教育史を捉え直すことを主要なテーマとして、文献の検討・議論に取り組んだ。まず近代学校教育制度の展開を概観した上で、社会教育史に関する代表的な文献の講読をおこない、戦後社会教育史研究の特

徴を確認した。その後、公民教育論を展開した論者の思想などを検討することを通じて、戦前―戦後の社会教育の展開における公民概念の変容や公民教育の位置づけについて検討した。この際、講師の博士論文を参照しながら、公民概念の重層性や地域共同体といった視角を導入することによって議論を深めていった。さらに、公民教育を基底とした社会教育の観点から、近年の市民性教育に関する議論も取り上げられた。

【プログラム評価論】担当：非常勤講師・安田節之

本授業はS2の集中講義として開講された。授業の目的は、教育機関や企業組織、地域コミュニティにおける実践介入活動（プログラム）を客観化・可視化する手順を習得し、実証的に評価するための方法を学習することである。

授業の前半では、(1) 安田節之・渡辺直登著『プログラム評価研究の方法』（2008）、(2) 安田節之著『プログラム評価 一人・コミュニティ援助の質を高めるために―』（2011）をテキストに、プログラム評価の定義、目的、可視化の方法、評価の方法に関する講義が行われた。

授業の後半ではグループ活動、グループ発表、ディスカッションが行われた。具体的には、実際のプログラムを題材に、ロジックモデル作成によるプログラムの可視化作業が行われ、グループワークの成果発表とロジックの構造に関する討議が行われた。また、授業後のグループ課題では、プログラム評価の実施と評価報告書（テクニカル・レポート）の作成が行われた。

【生涯学習論文指導】担当：教授・牧野篤，准教授・李正連，新藤浩伸

本ゼミは、研究室に所属する大学院生が各自の研究を報告し議論する場として開講されている。昨年度までは毎週定期的の開講されていたが、本年度は各教員によるゼミの最終回に合わせて開講するよう変更がなされた。各回とも、学会発表や学位論文の執筆、各種紀要への投稿などを念頭におきながら、研究構想やその具体的内容について有志の院生より報告がなされ、報告をもとに参加者全員で討論を行う有意義な時間であった。院生の研究テーマは多岐にわたり、本年度は、教育と労働・福祉の関係に関する研究、まちづくりやコミュニティに関する研究、

地域と学校との協働に関する研究、高齢社会と学習に関する研究などが報告された。報告や議論を通して、内容だけではなく研究の進め方や研究の意義についても検討が及び、各自の研究テーマにも示唆を与えるものとなった。

【図書館情報学総合研究】担当：教授・影浦峽

【図書館情報学論文指導】担当：教授・影浦峽，客員教授・吉田右子

通称「総合ゼミ」と呼ばれる本講義は、主に図書館情報学研究室所属大学院生が参加する研究発表ゼミである。隔週で開催され、毎回2名が研究の進捗報告や学会へ向けた発表練習を行う。参加者は発表の形式と内容についてそれぞれ検討し、質問・コメント・アドバイスをを行う。本年度は昨年度に引き続き、4月に行われた初回ゼミにおいて研究の手続き・方法や論文を書く際の注意点などを共有する「研究ガイダンス」を実施した。発表者のテーマは、公共劇場、書店と図書館、公立図書館、大学図書館、学校司書、読書指導、図書推薦システム、自然言語処理、機械翻訳、翻訳者育成カリキュラム、災害時翻訳支援、発達性ディスレクシアとフォント、ハイパーテキスト読み、教科書と「小・中ギャップ」、「説明とは何か」、言語使用の規範と逸脱など多岐にわたった。このような、所属大学院生の研究テーマが多様でありそこに共通しているものを見出しにくい状況（とそれに起因するかもしれない研究への気軽な言及の減少）に対して、11月の総合ゼミでは影浦峽教授による研究室の共通テーマに関する講義が行われた。デカルト的言語使用、すなわち「合理的に疑問の余地なき」言語使用をめぐる探求が研究室のテーマとして共有された。例年1月には修士論文検討会が開催されるが、本年度は修士論文提出者がいなかったため通常の総合ゼミが行われた。

【図書館情報学研究方法論】担当：教授・影浦峽

研究に必要とされるスキルの習得を目的とし、受講者が(1)本の読み方、(2)確率と統計の知識を身につけることを目標に掲げた。*Probability and Statistics*. 2nd ed. (DeGroot, Morris H: 1989)を購読し、各受講生が担当部分について解説を行う形で、第3章「Random Variable and Distribution」第7節までを検討した。検討にあたっては、本文に掲載されていない簡単な具体例の作成や、章節ごとのキ

ワードの出現数に着目した目次の再構成等を通じて、導入された概念が正しく把握されているかを確認した。本の読み方に関しては、「5層の読み」を意識した。すなわち「1. 文字通りに読む; 2. キーワードを書き出しながら読む; 3. 段落を目安に、議論のまとまりに指示的な言葉を与えながら読む; 4. 議論のまとまりに報知的な言葉を与えながら読む; 5. 俯瞰的な構造を意識しながら読む」ことである。これら一連の作業を、頭の中で出来たつもりにならず、すべてノートに書き出すという具体的な動作として実行し、「読み方」を習得することを目指した。

【情報媒体構造論】担当：教授・影浦峽

2017年度の情報媒体構造論では、機械的な用語抽出 (Term Extraction) の手法に関する文献を講読した。対象とした文献は、2000年以降の計算機を用いた用語抽出の方法に関するものである。最初の3回の授業では、教科書を用いて、語彙論の基礎、及びキーワード抽出 (Keyword Extraction) と用語抽出 (Term Extraction) の差異を確認した。以降は各回、類似する手法を検討した文献を1~3件対象とし、一人の発表者が文献の内容を紹介するという形式で講義を進めた。

Tfidfといった素朴な指標から始まり、統計的な手法、さらに確率的な手法と統計的な手法を複合した抽出方法まで、2000年以降の用語抽出の手法の展開を概観することができた。

【図書館情報学理論研究】担当：客員教授・吉田右子

本授業では、日米の公共図書館史に関する文献の講読を通して、両国における職員の専門性やサービスの特質に関する議論が行われた。具体的には、(a) 川崎良孝・吉田右子編著『現代の図書館・図書館思想の形成と展開 (2017)』、(b) ポール・T・イエガーら著、川崎良孝・高嶺裕樹訳『図書館・人権・社会的公正 —アクセスを可能にし、包摂を促進する—』(2017)、(c) 小川徹ら著『公共図書館サービス・運動の歴史1・2』(2006)、(d) 奥泉和久著『図書館史の書き方・学び方: 図書館史の現在と明日を考えるために』(2014)等を講読し、図書館の発展過程、理念、職員の専門性、サービス、地域における図書館の役割等について議論が交わされた。

他方で、授業の前半においては、受講者による研

究発表および討議が行われた。受講者の研究課題は「ナチスドイツ下の図書館と教養」、「婦人の読書活動と学習」等であり、講読文献との関連で議論が展開された。

【北欧の生涯学習と図書館】担当：客員教授・吉田右子

本講義は、北欧における生涯学習の拠点としての図書館に関する体系的な知識の習得を目的とするものである。講義はデンマーク、スウェーデン、ノルウェーとフィンランドの公共図書館に焦点が当てられ、図書・写真・動画資料と図書館 web site の情報を通じた講義、ゲスト講師による紹介と質疑及び受講生の発表で構成された。

北欧社会での図書館の位置付け、図書館の歴史、運営やサービス、施設、利用者と北欧図書館の特徴であるデジタル化と静かではない姿が説明された。これらを語るために、前提となる北欧の自然と気候、社会が目指している価値観、北欧のコミュニティ、法律、移民関連状況も紹介された。

ゲスト講師である Swedish Agency for Multilingual Media (MTM) の Junko Söderman 氏からは、全てのメディアがバリアフリーである社会をビジョンとするスウェーデン MTM の役割とメディアについて、三重大学の和気尚美氏からはデンマークの公共図書館の概要をはじめ移民者関連サービスについて講義を受けた。

受講生の発表では、北欧の教育と各々の研究テーマを関連付けて、デンマーク王立図書館の動向概観、社会教育と子どもの貧困対策、「読書介助犬」の取り組み、映画教育、図書館の外国人向けの読み支援などについて発表と議論が行われた。講義期間中に北欧に訪問してきた受講生による報告も行われた。

【書物と出版】担当：非常勤講師・柴野京子

デジタル化・ポーダレス化に伴い「出版」のあり方が変化している状況下で、社会の中での出版物の位置づけや出版という営為のメカニズムを検討する講義である。

本講義は各回が3つのパートに分かれている。第一のパートでは、出版・メディア史を論ずる文献を受講者で分担しながら輪講した。扱った文献は前田愛・永嶺重敏・佐藤健二・長谷川一・大澤聡の著作の一部で、読書・読者論、メディア史としての近代

出版史などが取り上げられた。第二のパートでは現代の出版制度の仕組みや出版を取り巻く諸問題についての講義が実施された。授業後半の第三のパートでは、1997年から2005年に亘り刊行された雑誌『本とコンピュータ』の記事について調査し、参加者がそれぞれの関心に基づいた視点でまとめて報告した。ここでは、当時の日本のデジタル化・データベース化・オンライン化と出版・書物・読者を巡ってなされた議論が検討された。最終回には『本とコンピュータ』第二期の編集に携わった本学情報学環の水越伸教授を招き、刊行当時の様子を聞いた。

2017年度 個人研究活動報告

(図書館情報学研究室 博士課程)

[蘇懿禎]

本年度は博士論文「台湾の小学校における読書指導史の構築～1952年から2010年代にかけて～」の研究方法を大きく変更しました。教育現場実態を把握するため、各年代の小学校教員へのインタビューを実施する予定でしたが、サンプリング対象によって代表性が不足という危惧があるので、教育学術誌を文献にし分析する研究方法に変わりました。8月から、1950年代～2010年代までを範囲に設定し、10誌の教育学術誌における関連文献を全て抽出しました。現在、収集資料の分析を中心に研究を進めていく予定です。

個人研究のほかには、ヨーロッパの13カ国の公共図書館をめぐって見学した記録をまとめました。今年の5月に台湾の出版社から本を出す予定です。そして、台湾台南市中央図書館の児童館コンサルタントを担当しています。

[高橋恵美子]

本年度は、学校司書についての本の執筆とともに出版前の確認の作業を行った。『学校司書という仕事』のタイトルで青弓社より4月28日出版された。6月3日日本図書館協会学校図書館部会学習会で「学校司書の専門性 ―『学校司書という仕事』を書くにあたって―」と題する報告を行った。

また学校図書館の情報交流紙『ぱっちわーく』が2017年3月終刊となり、学校図書館研究の情報源としての『ぱっちわーく』の意義や重要性を国立国会

図書館カレントアウェアネスに書くことになり、こちらは「カレントアウェアネス No.332 2017年6月20日」に「学校図書館の情報交流紙『ぱっちわーく』の24年―学校図書館研究の情報源としての意義―」のタイトルで掲載された。

本の出版の影響もあり、以下のような講演を行った。7月31日静岡県西部高等学校図書館研究会研修会「これからの学校図書館」、8月21日静岡県高等学校図書館研究大会「教科と連携した図書館利用 ―さまざまな事例から―」、10月6日横須賀市学校図書館ボランティア講座「子どもたちに読書と学びの楽しさを伝える学校図書館づくり」。

博士論文は、日本の学校司書の配置と実践の歴史から、学校司書の専門性確立をめざす歩みをテーマに執筆中である。また査読論文として、学校司書配置に関する各種調査の分析を準備中である。

[新井庭子]

テキストの難しさの研究として、既存の研究ではテキストか人間の認知の仕組みかどちらかしか研究対象にされてこなかった。本研究は、この2つの視点の両方を持ちつつ、主に知識構成を支える言語表現の形式に焦点を当て、小・中の理科教科書を材料にこの問題への接近を試みる。我々は、読みを困難にするテキストのパラメーターを予測し、小・中教科書テキストの間にそのパラメーターで表現できるギャップがあることを新井庭子ほか(2017)で示したが、その研究はまた、表層的な特徴に加え、質的な観点から言語表現を検討する必要性を示した。本研究では、質的な関連から言語表現を特徴付けるカテゴリーとして、定義表現と分類の表現に着目し、計量的な分析を行った。その上で、定義表現の読めなさについて仮説を立て、読解能力テストを用いて仮説の検証を行った。

[矢田竣太郎]

昨年度従事したKDDI総合研究所・知能メディアグループでのインターンを3ヶ月延長させていただき、テキストに含まれる感情の要因を分析する技術に関して継続的に研究した。この成果は国際学会International Conference on Data Miningのワークショップ(ニューオーリンズ)で発表した。また、修士課程より継続的に参加している国際学会International Conference on Asia-Pacific Digital

Libraries (タイ)において、ツイート談話の形式分析に関する手法を発表した。本年度3月から、年度をまたいで3ヶ月間、オーストラリアのCSIRO研究所にてツイートの感情・評判抽出に関する研究を共同で実施する機会を得た。

いずれの研究活動も博士論文テーマ「前読書家の読書を触発する図書推薦システム」に強く関係するもので、システムが処理する「図書に言及するツイート」から取り出せる情報について知見を増やすことができた。

〔山田翔平〕

本年度は、これまで行ってきた研究の成果を論文として投稿、及び博士論文執筆に向けた準備を行った。これまで、百科事典とWikipediaの機能的差異を分析する研究を行ってきたが、その成果を“The conceptual correspondence between the encyclopedia and Wikipedia”というタイトルの論文とし、『日本図書館情報学会誌』に投稿した。

博士課程での研究テーマを「日本の大学図書館の蔵書が担う知識の編成の検討」と定め、分析対象となる大学図書館の蔵書データの獲得を行った。

また、大学図書館の蔵書を調査・分析した研究のレビューを行い、既往研究における分析の観点、及び成果を整理した。この研究成果は、「大学図書館の蔵書を分析した研究の現状と課題」というタイトルの研究ノートとし、本誌『生涯学習基盤経営研究』に投稿した。

〔朱心茹〕

博士課程に進学した。昨年度に引き続き「発達性ディスレクシアに特化した和文書体」の研究開発を行っている。

現段階の研究内容は主に書体の作成と書体の読みやすさに関する実証実験である。2017年7月に2種類の書体プロトタイプが完成したため、9-10月に予備実験を行い、12月より本実験を行っている。倫理審査の申請・実験参加者のリクルート・関連団体とのコミュニケーションといったプロセスを初めて経験した。書体作成については、大日本印刷秀英体開発室から助言を得た。

研究の進捗について、7月に島根県で開催された発達性ディスレクシア研究会と11月にコーンケン(タイ)で開催されたAsia Library and Infor-

mation Research Group Workshopにてそれぞれ口頭発表を行った(いずれも山田翔平氏・影浦峽教授との共同研究)。発達性ディスレクシアの研究者および図書館情報学の研究者から有益なコメントと助言を得た。

上記研究と並行して、「UDデジタル教科書体の欧文フォントの可読性と視認性に関する研究」を株式会社モリサワと共同で行っている。

実証実験終了後は書体カスタマイズシステムの開発に着手する予定である。その準備として国立情報学研究所の佐藤真一教授とSang Phan博士の指導のもと深層学習の学習にあたっている。

〔唐麟原〕

本年度は学際情報学府学際情報学専攻の修士課程から博士課程に進学した。前期では、修士課程で行われてきた国会答弁に関する研究の継続として、答弁に使われる用語の定義に関する研究に取り組み、国際学会 Conference on Empirical Methods on Natural Language Processing のワークショップ Natural Language Processing meets Journalism (コペンハーゲン、9月)でその成果について報告した。後期では、引き続き言語の規範的使用を研究テーマとするが、研究材料を国会答弁から法律文書に変更した。法律用語の規範的使用に関わる判決文の分類問題に取り組み、その成果を3月の言語処理学会で報告する予定である。また、博士論文の執筆に向け、テーマの方向性についての検討を行った。

〔韓尚珉〕

今年度より、本コース博士課程に進学した。「非母語で書かれたオンライン・テキストの読みにおける情報提示方式によるテキスト理解の様相」をテーマとして研究を行った。研究の第一歩として、リンクで移動する特性を持つテキストであるハイパーテキストを対象にして、ハイパーテキストの読みの理解に影響を及ぼす要因にはいかなるものがあるかに関して先行研究のレビューを行った。レビューでは、ハイパーテキストの構造と構造的特徴によって読み手が読む時に現れる認知的特徴を整理し、実証的研究を行った先行研究で検討された要因を抽出して分析した。この過程と結果について研究室の総合ゼミや研究ゼミで発表を行い、コメントと指導をいただいた。執筆しているレビュー論文は2018年度に投

稿する予定である。また、日本語を第二言語として使用している人々を参加者とする実験の設計を進めている。

〔陳龍輝〕

I am concerned with the application of terminological networks to the understanding of knowledge structure of specific domains, and how commonalities are present across areas with a shared set of analyses techniques. We make a distinction between the conceptual system and the terminological system of a field; i.e., the terminology of the field is assumed to be a representation of the conceptual structure, which remains intact independent of text and language. By studying a network representation of the domain knowledge, one can explore common structure across space (languages) and time (the development of the field).

We begin by extending the definition of the terminological network as a representation of knowledge with an infusion from semantic, distributional and syntactic information. By showcasing desirable qualities from such networks, we present an exhaustive view of the knowledge fields as networks which can be analyzed and produce new word products. In addition to the capability of exploring subfields within the knowledge field, with this tool it is possible to generate according to both the existing terms in the field new knowledge elements and the semantic word elements in the sense of written meaning. This has implications for both translation when applied across languages within the same discipline, and applications to new term definition and represents an objective approach to terminological processing and growth.

〔中村由香〕

現在、生協総合研究所で研究員として働きながら、博士論文を執筆している。本年度の主な研究活動は、以下の通りである。

【論文・雑誌記事】

- ・中村由香「生協における CSV の可能性：コープ

こうへの取り組み」『生活協同組合研究』 vol. 498, p. 56–60, 2017.

- ・中村由香「コープみらい『くらしのプラットフォーム』の取り組み」『生活協同組合研究』 vol. 499, p.54–57, 2017.

【その他】

- ・生協総合研究所 研究員
- ・日本弁護士連合会司法調査室 研究員
- ・明治学院大学社会学部 非常勤講師

(図書館情報学研究室 修士課程)

〔名倉早都季〕

本年度より図書館情報学研究室の修士課程に入学した。前期は、修士論文研究テーマ設定のため、関連研究を読み進めた。卒業論文執筆時からの関心であった「言葉を論理的に構成すること」を中心に据え、「理由を説明するとは何か」を大学入試問題(国語・数学)の分析を通じて明らかにすることを決めた。後期は、研究に利用するデータの検討と入手を行った。また、データから探索的に「説明」の特徴を探るため、プログラミングの基礎的なスキル習得に努めた。

研究以外では、図書館情報学方法論等、大学院開講の授業を中心に、統計の基本的な知識と統計ソフトの操作を勉強した。M1 研究ゼミナールでは、リサーチクエスションの作り方や文献検索など、具体的な作業として研究の手続きを学んだ。以上のように、研究のための基礎的なスキルや知識の習得に力を入れた年であった。今後は卒業論文を再構成した論文の執筆・投稿と共に修士論文の研究を進めていく予定である。

〔BOURKE, Rebecca〕

In April, I entered the first year of the Cultural and Human Information Studies Course, Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, and joined the Laboratory of Library and Information Science. My research activities this year focused on solidifying the theme for my masters dissertation. I have continued my interests in translation studies and natural disasters from my undergraduate thesis, and have decided to focus on the theme of 'multilingual information provisioning for non-Japanese speakers during

crisis scenarios in Japan'. Much of my research was devoted to reading broadly in the fields of translation studies and disaster communication studies, and I took classes in disaster studies to gain a better understanding of the field as a whole. Additionally, I participated in research seminars to gain a better understanding of how to conduct research at graduate level, and attended the intermediate and final master's presentations for my department to gain an understanding of what will be required of me in my thesis. I plan to present the initial findings of my research in the beginning of the new academic year.

(社会教育学・生涯学習論研究室 博士課程)

[杉浦ちなみ]

本年は、以下に取り組みました。

(論文・記事)

・堀尾輝久・太田政男・長澤成次「座談会 教育基本法施行 70 年を考える」(担当:記録)『月刊社会教育』2017 年 11 月号, p. 38–45, 国土社

・「岐阜県郡上市・郡上おどり 一人から人へ、地域でともに一」『月刊社会教育』2018 年 1 月号, p. 60–63, 国土社

(口頭発表)

・「地域文化の伝承基盤としての社会教育 一鹿児島県奄美大島のしまうた・八月踊りを事例に一」日本音楽教育学会第 48 回研究大会, 愛知教育大学, 2017 年 10 月 21 日

[西川昇吾]

昨年度に引き続き、社会教育学における労働というテーマで研究を行った。具体的には、戦後日本の教育学において、当為としての教育学的価値との関係の中で労働がどのようにとらえられてきたのかをレビューし、その上で、これまでの社会教育学の議論で前提とされてきた当為概念としての労働とは異なる形で労働について議論していくことの意義について検討した。以上の成果は近日中に投稿論文としてまとめる予定である。

また今年度は、企業と大学との共同研究にも参加し、子育てをする女性の自立支援プログラムの作成に向けた準備を行った。

【学術雑誌における解説・総説】「公民館研究の動向」

(丹田桂太, 中川友理絵, 大山宏, 相良好美, 荻野亮吾と共著)『日本公民館学会年報』第 14 号, 2017 年 11 月, p. 157–161.

[須藤誠]

博士課程も 3 年目を迎えた。本年度は博士研究において議論を出立させる前段階の作業として、教育学や周辺領域の原理論的文献を腰を据えて読解することとなった。具体的には、超高齢社会の到来が課題化されている今日の社会状況を念頭に置きつつ、教育実践・社会教育実践を検討するうえで、「空間(ないしは場所)」「時間」そして「身体」が旧来いかに措定されてきたのか、そして今日において教育実践を議論する上でいかに措定され直しようのか、について検討した。その結果として析出された複数の論点については、昨年度までに各所で発表してきた内容を肉付けしつつ、来年度以降積極的に発表する所存である。

ほか、院生有志で進めている「岡さんのいえ」(世田谷区・地域共生のいえ)研究プロジェクトの成果について報告書のとりまとめ作業をおこなうとともに(発表準備中:2018 年 1 月時点)、同団体における区受託事業にも社会活動的に関与した。加えて、8 月後半に柏市内の 2 地区で実施された東京大学キッズセミナーにスタッフとして関与した。

[松田弥花]

本年度主に行った研究活動は、以下の通りです。

(論文)

・「スウェーデンにおける子ども・若者を対象としたアウトリーチ事業 一『フィールドワーカー』に着目して一」日本社会教育学会編『子ども・若者支援と社会教育』「日本の社会教育」第 61 集, 東洋館出版社, 2017, p. 124–133. (単著)

・「スウェーデンの障害児者に対する学校教育と社会教育の教育課程の接続 一知的障害特別学校と民衆大学を対象に一」高知大学教育学部編『高知大学教育学部研究報告』第 78 号 (2018 年 3 月刊行予定) (共著)

・「スウェーデンにおける障害児者を対象とした学校教育と社会教育における専門家の支援 一自立支援の観点から一」高知大学教育学部附属教育実践総合センター編『高知大学教育実践研究』第 32 号 (2018 年 3 月刊行予定) (共著)

(学会発表)

・“Comparative Study of Social-Education and Work: Sweden, Uzbekistan and Japan,” Social Pedagogy and Social Education: Bridging Traditions and Innovations International Conference, Mexico, February 22–24, 2018. (共同)

(ワークショップ)

・“How do People Become Active?,” Stockholm-Tokyo University Partnership, The 1st Workshop on Active Ageing: Living Longer and Healthier in an Aging World, Sweden, September 20–22, 2017. (研究紹介・単独)

(共同研究)

・『持続可能な開発のための教育』のイノベーションに関する日本・スウェーデン比較研究(日本学術振興会科学研究費補助金(17K18612)研究代表者・北村友人(東京大学))に研究協力者として参画。

[入江優子]

本年度は博士論文執筆に向けて関心・課題の整理を行いつつ、『『経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒』へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクト(東京学芸大学)』に携わり、フィールドワークを中心に研究を進めました。主な研究報告等は以下の通りです。

【論文】

「学校を核とした教育コミュニティの形成プロセスに関する研究—岩手県大槌町における「ふるさと科」を核にしたコミュニティ・スクールの立ち上げを事例として」『教育支援協働学』創刊号, 2018年2月学会設立・発行予定

【研究報告】

・「学校から見た「子どもの貧困」と包括的支援モデルの開発」お茶の水女子大学人間発達教育科学研究科平成29年度シンポジウム「家庭の経済的不利と学齢期の子どもの諸問題」, 2017年12月

・「附属学校・自治体と連携した主体的な進路選択支援モデルの開発」東京学芸大学パッケージ型支援プロジェクト平成29年度シンポジウム, 2018年3月報告予定

【その他】

・学習都市を支える人々のダイアログセッション「東京コンファレンス」第三分科会『『子どもの貧困』はなぜ見えにくいのか〜対話が創る包摂型社

会〜」(ファシリテート), 2017年1月

[詹瞻]

本年度は昨年度に引き続き、蔡元培の「美育」理論を取り上げ、中国の民国時期における美術館の設立、展開の歴史との関連に関する研究を行った。具体的には、蔡元培の「美育」理論はどのような形で社会に浸透していったのか、どのように美術館の設立と繋がるのか、つまり「美育」理論の推進過程の中で、施設でどのように実践化されたのかという視点から、蔡元培の「美育」理論の重要性を考察した。その結果を、9月に日本社会教育学会第64回研究大会(於:埼玉大学)で「蔡元培の『美育』理論と中国近代における美術館の展開」という題名の自由発表を行った。

その他、『月刊社会教育』2017年8月号における「日本社会教育学会6月集会」(p.64–65)のまともに参加し、報告書を共同執筆した。また、夏期休暇に千葉県柏市との共同企画である「キッズセミナー」に中国の提灯作りの講座に講師として参加し、子どもたちと共に作業、発表を行った。

[堀本暁洋]

本年度の活動は、以下の通りです。

(執筆)

・「地域とプロがともに支える人形浄瑠璃の継承—兵庫県・淡路人形座の取り組みを中心に—(シリーズ「暮らしと表現空間」3)」『月刊社会教育』2017年11月号, 国土社, p.62–65.

・「日本社会教育学会6月集会(集会報告)」『月刊社会教育』2017年8月号, 国土社, p.64–65. (共著)

(発表)

・「公共ホール整備過程への地域住民の関わり」日本社会教育学会第64回研究大会(於:埼玉大学), 2017年9月

(その他)

・東京都文京区のNPO法人「街ing本郷」の活動に関わり、定例カフェへの参加、広報誌の作成などを行った。

・千葉県柏市高柳地区でのキッズセミナーで、楽器作り講座の講師をつとめた(2017年8月)。その後、同年9月に行われた地域の催しにて、発表会を行った。

・地域文化研究会に参加し、地域の表現・文化活

動の実践や歴史について調査・研究を行った。

〔松尾有美〕

本年度の研究活動は以下のようである。

<論文>

・松尾有美「韓国の仕事・家庭両立支援政策の現状と課題」『東アジア社会教育研究』第 22 号, p. 144-151. 韓国生涯学習研究フォーラム「韓国の平生教育・この1年」『東アジア社会教育研究』第 22 号, p. 118-129.

<学会発表>

・「韓国の仕事・家庭両立支援政策の現状と課題」日本社会教育学会第 64 回研究大会(自由研究発表), 2017 年 9 月 16 日

<翻訳>

・梁炳贊「東アジアの観点で共に学び、励ましながら」『東アジア社会教育研究』第 22 号, p. 72-73.

2017 年度は、韓国のソウル大校へ1年間交換留学し、社会教育・生涯学習分野だけではなく、南北関係論、成人学習論などを学んだ。

現地の学会、フォーラムにも参加し、現在の研究動向や学会として韓国社会の持つどんな側面に注目をしているのかについて、理解を深めることができた。個人研究についても、修士論文から引き続き「子育て」に大きく関心を持ちつつも、対象を働く母親への地域社会での育児支援に徐々に絞っていく、情報収集、資料収集、そして実践への参与観察を行った。

〔丹田桂太〕

2017 年 4 月に博士課程へ進学した。本年度は、昨年度執筆した修士論文に基づきながら、そこでとりあげた課題および考察を精査するとともに、その成果を学内外で発表した。まず、2017 年 9 月に行われた第 64 回日本社会教育学会において、「青年のキャリア形成をめぐる研究枠組みの再検討」というタイトルで報告を行った。また、本コース紀要に「青年の「地元志向」をめぐる研究枠組みの考察」というタイトルで論文を投稿した。この他、日本公民館学会の 2016 年から 2017 年にかけての研究動向の一部を執筆した。

その他、岐阜県岐阜市との共同研究や、文京区本郷地区のまちづくり NPO「街 ing 本郷」の定例カフェへの参加および会報の執筆、千葉県柏市高柳地区におけるキッズセミナーでの講師の担当など、研究

室外での活動にも積極的に関わった。

〔大野公寛〕

今年度より博士課程に進学し、引き続き学校と地域の関係を大きなテーマとして研究を進めている。例えば学校は「社会に開かれた教育課程」によりそのあり方を地域社会との関係を軸に組みかえられつつあり、また地域はその学校を総がかりで支えるとともに学校を核とした自らの経営を求められてもいる。そうした状況の中で、地域住民による学校への参加をどのように捉えるのか、現在は特にその枠組みを、学校参加論の整理をおこないながら検討している。これに関連して、日本社会教育学会第 64 回大会において「学校参加枠組みの展開契機としてのサイレント・マジョリティの学校参加論 ―島根県立隠岐島前高校魅力化プロジェクトを事例として―」を発表した。

また、こうした関心から、今年度より開始した岐阜市教育委員会との共同研究に参加し、地域の高齢者と子どもとの関係の構築にかかわる調査を進めている。

その他、引き続き文京区のまちづくり NPO「街 ing 本郷」の活動にかかわりながら、広報誌の作成に取り組んでいる。

(社会教育学・生涯学習論研究室 修士課程)

〔末光翔〕

本年度は主に、修士論文「精神障害者を持つ家族の支え合いに関する実践的研究 ―精神障害者の『家族による家族学習会』における振り返りの場の役割の検討を中心に―」の執筆を行った。本論文は、社会教育分野でこれまで検討されてこなかった精神障害者家族の学習のあり方、エンパワメント(自分の人生をコントロールする力を得るプロセス)のあり方について、「家族による家族学習会」と呼ばれる学習実践の具体的な場面に注目して検討を行ったものである。

特に、学習の進行を担う家族スタッフと、支援者の立場にある家族(アドバイザー)が共同で行う「振り返り」の場面に着目した。参与観察データの分析・考察を通じ、家族相互のエンパワメントを引き起こす「振り返り」の場の構造および「振り返り」の支援のあり方について論じている。

また外部活動として、国立市公民館におけるしよ

うがいしゃ青年室教室（コーヒーハウス）の活動に参加した。地域における障害者の学びや地域との関わりにも関心があり、座学と並行して青年室教室のスポーツ講座や料理講座への参加を続けている。

〔粟田智美〕

1年間の休学期間を経て、本年度10月より修士課程に復学した。院ゼミにおける文献講読や討論を通じて、社会教育・生涯学習の基本的な視点や動向、研究の手法について学んだ。また、当事者研究に関する他研究科・コースの講義を通して、精神的な困難さを抱えた人々及びその人々を取り巻く状況、また彼らへのエンパワメント・アプローチについて知識を深めた。

個人の関心は、何かしらの困難さを感じている人々が、他者と繋がることによってどのように意識を変容させているか、またそうした意識変容はどのような場の中で生じる傾向にあるのか、という点にある。その中でも特に孤立感を感じている母親に関心を寄せ、現在行政で子育て相談業務に携わりながら、彼女らを取り巻く実態について知見を深めているところである。また、文京区青少年プラザを利用する中高生が、施設内での他者との関わりの中でどのような意識変容及び行動変容を起こしているかについての調査に関わっている。

〔鯛仁和〕

本年度は主に、修士論文「まちづくりに参加する住民の意識変化に関する研究 ―パウロ・フレイレの識字教育における「意識化」実践の視点から―」の執筆に取り組みました。本論文では、まちづくりに参加する過程で住民の意識にどのような変化がおき、その変化がまちづくりにどのような影響を与えているのかに関して、パウロ・フレイレの「意識化」の視点から考察を行いました。それにより、住民がどのように地域住民としての主体を獲得し、まちづくりというものが成立しているのかに関してのあり方を提示しました。

また、昨年度に引き続き、NPO法人「街ing本郷」の活動に参加しました。隔週で開催される定例カフェに参加し、隔月で発行される会報誌「街ingだより」の作成・編集作業に取り組みました。

〔松本奈々子〕

昨年度から、地域や文化に関心を持ち関連文献を読み進めてきた。さらに、並行して高齢者フォーラムや飯田や本郷での調査や活動に携わるなかで、「超高齢社会において老いることとそれについて学ぶこと」というテーマに取り組むことに決めた。現在、個人の研究に関する作業として、主に以下の三つを行なっている。まず、社会科学系の基礎的な文献を講読することである。第二に、「老いること」がいかに語られてきたのかを問う老年社会学の視点から、教育学の分野の先行研究を整理することである。第三に、修士論文で検討しようとしている「華齢なる音楽祭」の予備調査をふまえて、今後の調査の計画をたてることである。

〔岡本知佳〕

2017年4月に修士課程に入学し、社会教育学・生涯学習、博物館学、図書館情報学、学校教育学等に関する講義を受講した。夏季休暇中には西脇市岡之山美術館において博物館実習を行い、「教職課程・学芸員等実習報告会」にて実習経験を報告した。

研究活動においては、研究方法について学習し、研究課題の検討を行った。具体的には、1950年代の婦人の学習実践に着目し、先行研究のレビューを行うなかで、学習の意義が主体形成として論じられる場合の“主体とは何か”という問いを立て、研究課題を「婦人の学習過程における主体形成の『主体像』に関する考察」（仮）に定めた。来年度は、先行研究において「主体」がどのように捉えられてきたか等について考察する予定である。

研究室の活動としては、豊田市調査実習や岐阜市の「中学生とシニアの熟議ワークショップ」、文科省委託事業「長寿社会における生涯学習政策フォーラム」、NPO法人「街ing本郷」の活動等に参加した。

〔豊田瑠璃〕

本年度より社会教育学研究室の修士課程に入学致しました。1年を通し、授業を通して基本的な考え方や方法論について学ぶことに注力しました。夏学期は量的研究と質的研究両方に興味を持っておりましたが、解釈人類学の書籍をきっかけに人類学の方法論に特に惹かれ、冬学期には文化人類学の授業を履修しました。そして、高齢者が社会との関わりの中で生と死をどのように意味付けしていくかについて

て着目し、死生学について基本的な文献を整理し読み進めております。今後フィールドを定めるとともに、テーマの絞り込みを行っていきます。

個人研究のほかには、研究室プロジェクトであるものラボ JAPAN の運営に携わらせて頂くほか、豊田市旭地区や柏市にてまちづくりに携わる市民の方々にお話を伺いました。

学位論文

博士論文

2017年4月(課程博士)

浅石卓真「中学・高校の理科教科書における知識の計量情報学的分析」

修士論文

2018年3月

末光翔「精神障害者を持つ家族の支え合いに関する実践的研究 —精神障害者の「家族による家族学習会」における振り返りの場の役割の検討を中心に—」

鯛仁和「まちづくりに参加する住民の意識変化に関する研究 —パウロ・フレイレの識字教育における「意識化」実践の視点から—」

福森敏也「学校と地域の協同による地域の担い手づくりに関する研究 —長野県飯田 OIDE 長姫高校の「地域人教育」に着目して—」

図書館情報学研究室教員・院生一覧

教授 影浦 峽

客員教授 吉田 右子

博士課程 蘇 懿禎
高橋 恵美子
志村 瑠璃
新井 庭子 (学環)
矢田 竣太郎
山田 翔平
朱 心茹
唐 麟源 (学環)
韓 尚珉
陳 龍輝 (学環)
中村 由香

修士課程 名倉 早都季
BOURKE, Rebecca (学環)

研究生 朴 恵

松尾 有美
丹田 桂太
大野 公寛

修士課程 末光 翔
栗田 智美
鯛 仁和
福森 敏也
松本 奈々子
佐藤 志保里
天沼 亜沙子
岡本 知佳
豊田 瑠璃

研究生 楊 映雪
姜 寶美

社会教育学・生涯学習論研究室教員・院生一覧

教授 牧野 篤

准教授 李 正連
新藤 浩伸

特任助教 松山 鮎子
古塚 典洋

博士課程 侯 婷婷
大山 宏
中川 友理絵
山口 香苗
相良 好美
杉浦 ちなみ
西川 昇吾
須藤 誠
松田 弥花
入江 優子
詹 瞻
堀本 暁洋